

家庭での親子の相互関係と子どもの学業成績

——JLSCP を用いて——

東京大学 香川めい

1 目的

本報告は、家庭内での親子の相互関係と子どもの学業成績との関連を明らかにすることを目的とする。コールマン (1988) の人的資本形成に対する社会関係資本の議論を嚆矢に、教育と社会関係資本との関係は、海外で数多くの研究が蓄積されてきた。比較して、日本を対象とした実証研究はそれほど多いとは言えず (露口 2011)、主要な関心も保護者の学校関与やネットワークの閉鎖性といった家庭外の事象であり、一定の年齢集団に限られたものが多い。本報告は、小学生から高校生までの幅広い年齢層を分析の対象とし、子どもの成長による関連の変化を検討する。

2 データと方法

分析には、「子どもの生活と学びに関する親子調査 2015 (JLSCP2015)」(東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所, 2015) を用いる。子どもと保護者それぞれから回答が得られた小学4年生以上のペアを分析の対象とした (N=11,957)。家庭内での社会関係資本の指標として親子の相互関係 (親子の会話の内容, 保護者の子育て法, 親子間の信頼関係) を用いる。

3 結果

子どもの発達に伴って親子関係は変化する。保護者の関与は小学生が最も高い。会話の内容も日常生活の出来事から「将来や進路のこと」へとシフトする。信頼関係は総じて高いが、中学生で若干下がる。親の「教える」という直接的な関与は、どの学校段階でも学業成績には影響しない。子育て法では中学生までは「ほめてのばす」ことのプラスの効果、中学生と高校生では「統制・抑圧的」な関与のマイナスの効果がある。勉強や成績に関する親子間の会話と親子ともに信頼し合っていることには、学校段階にかかわらず正の効果が認められる。中学生以降では、子どもが親を信頼していないことに成績と負の関連がある。

4 結論

親の関与という点では、保護者の直接の関与ではなく、興味関心を喚起したり、ほめたり応援したりといったいわば見守り型の関与に子どもの学業成績に対する影響が認められるものの、高校生の子どもの対する効果は相対的には小さい。これをふまえると、親子関係が学業成績を大きく左右しうるのは中学生までで、そこまでにどのような関わり方をし、この段階を乗り切るのか、どのような親子関係を構築し得たのかが子どもの学業達成には重要であることが示唆される。

謝辞

「子どもの生活と学びに関する親子調査 2015 (JLSCP2015)」は、東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所共同研究「子どもの生活と学び」研究プロジェクトが実施した調査である。データの使用にあたっては、同プロジェクトの許可を得た。

文献

露口健司, 2011, 「教育」稲葉陽二・大守隆・近藤克則・宮田加久子・矢野聡・吉野諒三編『ソーシャル・キャピタルのフロンティア——その到達点と可能性』ミネルヴァ書房, 173-196.

Coleman, J. S., 1988, "Social Capital in the Creation of Human Capital," *American Journal of Sociology*, 94: S95-S120.